

デュルケム社会学はドイツ製？

—デュルケム社会学形成を巡る論争—

夏 刈 康 男

はじめに

1911年、デュルケム社会学を巡る一種挑発的と思われる著書が出版された。それは、S.ドゥプロワージュ（ルーヴァンカトリック大学哲学高等学院長）の著わした『道徳学と社会学の論争』¹⁾と題する著書である。その著書の第四章で彼は、デュルケム社会学の形成過程を取り上げ、そこにおいてデュルケム社会学が誰の影響を受けて形成されたのかを解明した。その結論としてドゥプロワージュは、デュルケムの社会学は、フランスのコントからではなく、そのほぼ全てをドイツの社会科学者の影響を受けて形成されたと断じた。

その著書を巡るデュルケムとドゥプロワージュとの約120年前の論争の一幕を現代に甦らせて、デュルケム社会学がドゥプロワージュの言ったようにドイツ製なのかどうか検証することが本稿の研究目的である。

なお、本稿で取り上げるデュルケム社会学形成過程については、次のように3区分する。①エコール・ノルマル・シュペリユール（以降エコール・ノルマルと略記）の学生時代。社会学研究を意識し、研究テーマを模索した社会学研究準備期。②エコール・ノルマルを卒業し、リセ教授となり社会学研究を懸命に始めた時期。この時期にドイツに留学し、社会学独自の研究対象と方法、道徳科学等について研究。③ボルドー大学講師就任初期。就任当初からデュルケムは、個別の社会学的現象をテーマに社会学講義を行う等して社会学形成に専念した。

ドゥプロワージュがデュルケム社会学の形成過程として主に考察するのは、上記の筆者の区分に従えば、②のエコール・ノルマルを卒業し、リセ教授となった時期の研究である。ドゥプロワージュがこの時期に的を絞ったのは、デュルケムのドイツ留学での研究が彼の社会学形成と深く関わっていると捉えたためである。筆者は、上記で示しているようにデュルケム

社会学の形成過程をエコール・ノルマルの学生時代からボルドー大学講師就任の数年後までと捉えているので本稿で取り上げる社会学形成期の幅は、ドゥプロワージュと異なる。

1. エコール・ノルマル時代の研究

デュルケム社会学形成過程の起源をどこに置くか。ドゥプロワージュは、デュルケムがドイツ留学中にシェフレ、シュモラー、ヴント等の社会科学者を研究することによって彼の一大原理を形成させることになったとして、主に彼がドイツに留学した1885-86年の時期をデュルケム社会学形成過程の起源と捉えて論じている。しかし、本稿では、「はじめに」で述べているようにその起源をドイツ留学以前のエコール・ノルマルの学生時代に始まる研究に注目する。なぜなら、学生時代の社会的政治的関心や師との出会いや哲学等々の研究の中からデュルケムは、社会学研究の芽を育み、生涯取り組むべき学問として社会学を確定させているからである。従って、彼の社会学形成過程の起源を知るためにエコール・ノルマルの学生時代から見ることにする。なお、この時期のデュルケムについてドゥプロワージュはほとんど取り上げていない。しかし、デュルケム社会学の基層を成すことになる学生時代の研究の重要性は、彼のドゥプロワージュへの反論で示されることになる。

エコール・ノルマル時代デュルケムは、どのような問題に関心を持ち、どのように社会学研究へと結びつけていったのか。彼は、学生時代反教権主義を主張するガンベッティズムや教育の世俗化を推進するJ.フェリーの教育改革を中心とする当時代の社会的政治的論争に強い関心を持った。そして、彼は反教権主義と世俗主義を生涯貫き、後に社会学者になって、それらの思想に基づいて自身の道徳論や教育論を構築した。

当時代の社会的政治的関心の高まる環境の中で彼は、特に社会問題に関心を持ち、この問題の研究に身をささげる決意を固めた。彼が、その時に有した研究テーマは、「個人主義と社会主義の関係」であった。彼は、このテーマで「経済的自由主義を示す個人主義と国家又は他の機関による社会生活の規制を優先する教義を持つ社会主義」について (P. Steiner 1994: 17) 研究しようとした。T.パーソンズは、「学生時代に有された個人主義と社会主義に関する研究テーマのうち、個人主義への関心はデュルケムにとっては、広義の経済的個人主義の問題を解決するために新たな科学、す

なわち道德科学さらには社会学という未知の道に踏み込むために大きな役割をはたしたという点で、意味があるし、社会主義に関しては、デュルケムの理論展開過程の出発点となった」(T. パーソンズ 1982:17, 58) とし、中久郎は、最初期の社会主義への関心は、「『社会分業論』における社会理論とその構成概念に生かされている」(中久郎 1979:451) とそれらの研究テーマの意義を認めている。すなわち、学生時代の研究テーマに基づく研究は、スペンサー等の功利主義的個人主義や自由主義の批判の上に、新たな個人と社会との関係を構築するための科学、すなわち社会学あるいは道德科学へと繋がっている。

デュルケムの社会学の専門化の観念と彼の一大原理である社会实在論についてドゥプロワージュは、ドイツ社会学者に由来することを強調するが、デュルケムは、そうではなくそれらは、エコール・ノルマルの学生時代の恩師等の教えの中から生まれていると明言する。社会学の専門化については、エコール・ノルマルの恩師であるE. プトルーの教えによって得られたことが、デュルケム自身によって次のように語られている。「私が社会学と心理学との間に据えた区分の観念は、私の先生であるエコール・ノルマルのプトルー氏に先ず負っている。私は、各々の科学は、例えば、心理学は心理学的原理によって、生物学は生物学的原理によって説明するようにその原理自体によって説明しなければならないことをたびたび繰り返し彼から教えられた。その観念は、私に十分に浸透し、それを社会学に適用した。そして私は、A. コントの著書を読んでその方法を確実なものとし、社会学は、生物学にも心理学にも還元できないことを確信した。」²⁾ (E. Durkheim 1975 (1907) :403) まさに、デュルケムが社会学の専門化の観念をドイツ留学以前の極めて早い時期、すなわち学生時代に得ていたことが理解される。

社会学の専門化にとって重要な社会学独自の研究対象である社会实在論について1913年に発行された『社会学年報』第12巻(326頁)でデュルケムは、次のように述べている。ドゥプロワージュは、私の構築した社会学がドイツからの学問的寄与を受けて形成された、いわばドイツからの輸入品であると論じているが、私の社会学の基本概念である全体は諸部分の総体とは異なる一種独特の实在であるという公理は、エコール・ノルマルの学生時代のルヌヴィエ研究から学んだものでドイツからの観念ではない。ドゥプロワージュは、私の社会学を社会实在論と呼んだが、その实在論の

基礎となっているのは、学生時代に学んだルヌヴィエからのこの公理である、と。ドゥプロワージュの批判を振り払うかのようなこの論述は、本稿で取り上げているドゥプロワージュが1911年に出版した『道徳学と社会学論争』の中での指摘に対する反論としてなされたものである。

以上のブトゥーとコントそれにルヌヴィエに関するデュルケム自身の論述からわずかながらデュルケム社会学独自の対象、すなわち社会学の専門化に関わる原理の起源は、エコール・ノルマルの学生時代にあることが理解される。

2. ドイツ留学以前のリセ教授時代の書評論文

エコール・ノルマルを卒業後、デュルケムは約5年間リセ教授の職に就く。その5年間の中で彼は、1885年10月から6か月間ドイツに留学する。ドゥプロワージュは、そのドイツ留学での研究に着目してデュルケムは、ドイツ留学によってドイツ社会学者の「忠実な信奉者」となった(S. Deploige 1923 (1911) : 132) と、彼が留学時に研究したドイツ社会科学の影響の大きさを論じ、そして彼の社会学形成の起源はドイツ留学にあると明言した。

しかし、ドゥプロワージュは、デュルケムのエコール・ノルマルの学生時代の着実な研究と同様、ドイツに留学する前(1882-85年)のリセ教授時代の研究にもほとんど関心を示さずにデュルケム社会学の形成について論じている。ドイツ留学前のリセ教授時代は、デュルケムにとって決して社会学研究の空白期ではない。むしろその逆で彼は、その時期に『社会分業論』の最初の草稿を書き始める等「社会学こそが社会問題の解決を図りうる科学と考え、社会学研究に本格的に傾注するようになった。」(M. Mauss 1971 (1928) : 27-28 = 1977 : 7-8) この時期の研究で注目したいのは、先ずは研究の方法である。

デュルケムのとった研究方法は、社会学研究に役立つと思われる優れた社会科学文献を書評し、それを論文にするというものである。この研究方法は、後に彼が仲間とともに「社会学年報」を発行してデュルケム社会学派と呼ばれる一大社会学派を形成させることになったその「社会学年報」に適用された。「社会学年報」は、社会学専門の論文を掲載することを主な目的に創刊された雑誌ではない。デュルケムは、「社会学年報」創刊当時(1897-98年)は、まだ社会学専門の論文雑誌を発行させるほどフラン

スの社会学は、発展していないという認識を強く持っていた。そうした状況の中で彼は、専門科学としての社会学を構築するにはどうしたら良いのかを考えた。彼は、そのために先ずは、社会学に役立つと思われる先行する隣接諸科学の優れた諸成果をメンバーたちがそれぞれ研究し、それらの中から社会学にとって必要と思われる文献を書評論文にして「社会学年報」に掲載することにした。彼は、そうした方法を積み重ねることで隣接諸科学の優れた研究を学び、それによって多くの研究者が社会学者として実力を身につけ、彼らの誰もが社会学専門の論文を執筆し、雑誌にそれを掲載できるようになると考えた。そうした信念と目的を持って彼は、「社会学年報」を創刊した。それゆえ、「社会学年報」は創刊から5年ほどは書評誌と言える性格を強く有していた。(夏刘康男 1996:95) そうした「社会学年報」創刊の目的に見られる方法、すなわち隣接科学の優れた文献を研究して学び、それらを書評論文にするという研究スタイルをデュルケムは、自身がドイツ留学前のリセ教授時代に実践していた。

デュルケムは、その時期にどのような文献を選び、どのような書評論文を書いたのか。特に、彼が後に形成することになる社会学と書評論文とがどのように結びつくのか、興味が持たれるところである。リセ教授になって彼は、研究テーマを「個人と社会の関係」から「個人と社会的連帯の関係」に改め、社会学研究を促進させた。(S. Steiner 1994:17) そうした中で彼は、社会学研究に役立つと思われるフイエ、スペンサー、シェフレ等フランス、イギリスそれにドイツの社会学者の文献を手にする。彼は、1902年に公表した「フランス社会学におけるドイツの影響についてのノート」の中で、彼がドイツの社会科学を研究し始めたのは、リセ教授になった1882-84年であったと述べている。(E. Durkheim 1975 (1902):400) すなわち、彼がドイツの社会学者の文献を手にしたのは、リセ教授になってからだった。デュルケムは、ドイツの社会学者の文献を読んですぐに彼らの研究が「フランスを越えて優れていることに気付いた。」(E. Durkheim 1975 (1902):400) 初めて読んだドイツの社会学者の文献に刺激を受けたデュルケムは、彼らの文献を書評論文にして発表するとともに、彼等だけでなく彼が同時に関心を抱いて読んでいたドイツの社会学者以外の文献についても書評論文にして発表することにした。それらは、シェフレ、グンプロヴィッツ、スペンサー、フイエ等々の著わした文献に関する四つの書評論文で、それらは1885年と86年に発行された哲学評論に掲載さ

れた。³⁾

それらの四つの書評論文のうち、特にドイツ社会学者シェフレへの書評論文には、デュルケムの社会学形成過程を知る上で大変興味深い内容が二点含まれている。その一つは、デュルケムが社会学を形成させる上で第一に考えた、社会学独自の対象と方法を確立することによって独立科学としなければならないとする、社会学の専門化に関する観念が、ドイツ留学以前に有されていたことが明らかにされていることである。ドゥプロワージュは、『道徳学と社会学の論争』でデュルケムのこの観念は、ドイツの社会科学から得たと説いているが、そうではない。ここでの書評論文によってデュルケムのこの観念の起源は、フランスにあることが理解される。なお、前述しているようにデュルケムは、社会学の専門化の観念は、第一に恩師ブトラーとコントに由来すると明言している。もう一つは、デュルケム社会学をもっとも特徴づける、社会は単なる集合ではない、一種独特のもので、それは、個人に先行し、かつ個人よりも長く生き続け、個人から作用をうけるよりも個人に作用する存在である、とする観念である。ここには、彼が後に『社会学的方法の規準』において論じることになる、社会的事実の有する特性である先行性、外在性、永続性の三つの特性についての観念が、この時期にすでに有されていたことが認められる。書評論文において論じられているそれらの観念は、ドゥプロワージュが『道徳学と社会学の論争』で社会实在論と称することになる観念である。それゆえ、デュルケムは、ドゥプロワージュの言う社会实在論をドイツ留学以前に、有していたことになる。デュルケムは、前述したようにそれらの観念はルヌヴィエから得たと言っているので社会实在論は、明らかにドイツではなく、フランスのルヌヴィエに由来することになる。従って、社会实在論の起源はフランスにあるということになるが、しかし、この観念については次の事を付け加えておきたい。すなわち、デュルケムは、社会实在論をルヌヴィエから学んでいたとしてもそれで十分ではなかった。彼は、リセ教授になった後にシェフレの文献を読んで、ドイツにあって彼が社会实在論について極めて優れた観念を有していることを知る。そこからデュルケムは、シェフレに急激に関心を高め、ドイツに留学して彼から学ぶことになる。従って、デュルケムの社会实在論の起源は、先ずルヌヴィエに学んだことにあるとしても、その後、社会实在論についてシェフレから学び、研究し、充実させたという点で、シェフレの存在は大きい。

デュルケムは、書評論文の中で当時代のフランス社会学は停滞し、それに対してドイツの社会科学は発展している、このままではフランスで生まれた社会学がドイツの科学になってしまうという強い危機意識を表明している。ドゥプロワージュは、フランス社会学は「いまだに独自の研究対象を持たず、このままでは社会有機体論や生物学の一部となって隣接科学に吸収され、消失されかねない」(S. Deploige 1923 (1911) : 121) と見ていた。そうした状況の中でデュルケムは、確固とした社会学及び道德科学樹立を目指してドイツに留学する。

3. ドイツ留学での社会科学研究

デュルケム社会学は、「ドイツ留学で出会った社会学者との接触で豊かになった」(S. Steiner 1994 : 17) と言われるが、彼は、ドイツに留学してどのような社会学者と接触し、どのような成果を得たのか。それを知ることができるのは、彼が1886年に留学から帰国して直ちに著わし、その翌年に公刊された論文「ドイツにおける道德の実証的科学」(これ以降「ドイツ実証科学」と略記)(E. Durkheim 1971 (1887) = 1993) である。なお、ドゥプロワージュが『道德学と社会学の論争』でデュルケムの社会学形成過程を捉えて、彼の社会学はドイツ製であると言うのは、主にこのドイツ留学で得られた研究成果である「ドイツ実証科学」に基づいている。そこで、以下「ドイツ実証科学」で論じられた内容をドゥプロワージュの論述とともに簡潔に整理して、デュルケムがドイツの誰から何を学んだのか等について見ることにする。

デュルケムは、ドイツでシェフレ、シュモラー、ワグナー等講壇社会主義者と呼ばれる経済学者たち、法学者のイエーリング、それに道德学者・心理学者のヴェントに接触し多くを学んだ。そのうち、シェフレ、シュモラー、ワグナーからは、フランスではまだ知られていなかった政治経済学、国民経済学を学んだ。とりわけ、彼等からは、対象を抽象的に考察するのではなく、富の生産、交換、消費、利害、欲求の動向等々具体的に研究することを学ぶとともに、何と言っても、社会は個々人の単なる総体ではなく、別のもので、それは、生物学的意味での有機体ではなく、すぐれて個性豊かなもので、個人意識と一線を画し、個々人を強制する集合意識である、と説かれる社会实在論の基本的公準について学んだ。なお、ドゥプロワージュは、これと類似した概念は、当時フランスにおいて哲学者の

ルナンが説いているが、彼の哲学形成自体がドイツの恩恵を受けているとし、デュルケムがルナンの影響⁴⁾を受けて社会实在論を形成したとしても、その源泉はドイツから由来したものであると、ドイツ由来を強調する。(S. Deplouge 1923 (1911) : 116-119)

社会实在論に加えて、デュルケムは、シュモラーとワグナーから彼がこの時期に関心を持って取り組んでいた功利主義を抑止するための観念を得た。デュルケムは、功利主義者や自由経済学者は集会的利益を道徳の基礎としているが、しかし彼らにとっての集会的利益は、個人的利益の別の形にすぎない、彼らの経済学は、個人の欲求を満足させることを本質としていと批判するものの、そうした彼らの経済学とは異なる科学をどのように導けば良いのか思い悩んでいた。そうした中で彼は、シュモラーとワグナーから経済社会を律するために道徳学が重要であることを学び、人々があまり衝突や対立等せず共に生活できるようにすること、一言で言えば集会的利益を守るためには経済関係に道徳が必要であるという考えを持つようになった。すなわち、デュルケムは、シュモラーとワグナーから「経済学と道徳学とが親密な関係」(中島道男 1997: 34)にあることを学び、経済社会を律し、功利主義を抑止するための科学として新たな道徳科学の樹立が必要という考えを持つに到った。

イエーリングについてはどうか、ドゥプロワージュは彼についてはまったく触れていない。しかし、デュルケムは、「ドイツ実証主義」の中でわずかではあるがイエーリングについて、彼は倫理学を心理学の一部とする古い哲学的考え方に反して社会科学の一部分と捉え、道徳学がどのような方法で実証科学となりうるかに気づき、それを明確に示した功績者と高く評価している。デュルケムのそうしたイエーリング評価から彼が留学時に実証科学としての道徳学に強い関心を有し、研究していたことがわかる。そうした道徳科学へのデュルケムの思いは、次に取り上げるヴァントとの関係によってより明確になる。

最後に、ヴァントとの関係であるが、彼との関係では次の二点について注目したい。一つは、デュルケムが後に確信を持って説くことになる、社会的事実の決定原因は、個人意識の諸状態ではなく、それに先立って存在する社会的事実のうちに探求されなければならないし、その社会的事実の説明は、心理学的目的論的方法ではなく、社会学的機械論的でなければならないとする、社会学方法論への影響である。ドゥプロワージュは、それら

の観念は、明らかにヴントの授業に出席するとともに彼の著書『倫理学』を読んで学んで影響を受けたものと言う。(S. Deploige op.cit, 115-128) もう一つは、新たな道徳学、すなわち道徳科学への影響である。P-P.ザリオによれば、デュルケムは、ヴントの説く道徳論のうち①道徳は、集会的現象として研究しなければならない。②道徳学は、観察の科学である。道徳は、個人の心の中に根を下ろしているが、その根を発見しようとするれば、先ずもっとも良く育った枝を観察しなければならない。心理的観察だけで満足しては、道徳の特性を捉えることはできない。③道徳学は、応用的あるいは派生的科学ではない、独自の対象と方法を有する自立科学である、といった諸観念に「魅了された」。(P-P. Zalio 2001: 45) まさに、ヴントの道徳学は、デュルケムに道徳学において観察と帰納法を用いる実証的方法を想起させた。(S. Deploige op.cit, 129) なお、彼がそうした観念と方法に基づいて道徳科学の樹立を目指して『社会分業論』を著わしたことは、その第一版序文において明言されている。

こうして見ると、デュルケムは、ドイツ留学によって少なくとも社会学独自の対象(社会实在論)と方法(社会学的機械論)や道徳科学の構築に関して有効な影響を受け、それらが彼の社会学を形成させる上で重要な役割を担ったことは明らかである。ただ、ドイツ社会科学の影響がどの程度なのか、その評価はドゥプロワージュとデュルケム本人とは異なる。ドゥプロワージュは、デュルケム社会学の「大部分がドイツの生み出した成果で占められている」(S. Deploige ibit. 128) とし、デュルケムは、「私は、個人的にはドイツに負うところが多い。私が社会的实在論、有機体の複合性と発展の意味を得たのは、部分的にドイツの学派からである。彼等とのコンタクトで初めて私は、フランスの学派の諸観念の狭さをよりよく理解した」し、その頃に「私が光明を必要としたのはドイツである」(E. Durkheim 1975 (1902): 400) と、社会学形成期におけるドイツ社会科学の影響を否定しない。ただし、ドイツの影響は、部分的と、ドゥプロワージュに反論している。

4. 「社会主義の定義」論文とドイツ

すでに述べたようにデュルケムは、一度エコール・ノルマルの学生時代に「個人主義と社会主義の関係」を研究テーマとして社会主義の研究に取り組んだことがあったものの、卒業後に社会主義のテーマは、社会学の研

究には適さないという理由で、研究から外している。しかし、興味深いことにドイツ留学後、このテーマは研究対象として復活され、「社会主義の定義について」(以降「定義」と略記)と題して彼の最も早い時期の論文の一つとしてまとめられ、1893年発行の哲学雑誌に掲載された。なぜ、デュルケムは、ドイツ留学後社会主義に再び関心を寄せることになったのか。そこには、ドイツ留学時に学んだ講壇社会主義者シュモラーやワグナー等の影響が十分考えられる。そうしたことを踏まえて彼が社会学形成期に論じた社会主義論文について触れることにする。先ず、彼の社会主義研究と関係すると思われる背景として、「定義」論文研究当時のフランスの社会主義をめぐる動向等について少し見ておこう。

デュルケムが再び社会主義に関心をもち研究を始めた当時、フランスにおいて社会主義運動は、高揚が見られた。例えば、フランスに集産主義の名称でマルクス主義を紹介し、かつフランス社会主義労働者連合さらにフランス労働党を創設したJ.ゲードの勢力は、1890年から93年の間に党員を2千人から1万人以上に急速に増大させていたし、労働組合運動も活発化し、ゼネスト等も実施されていた。(J.C. Filloux 1970:10 = 1988:5, M. Fournier 1994:57) さらに、エコール・ノルマル入学以前からのデュルケムの友人J.ジョレスは、1893年1月に独立派社会主義者として下院議員に当選し、50人の同党の仲間とともに国会議員として社会主義運動を活発化させていた。(M. Fournier 1994:57, 2007:267) そうした社会主義政党勢力による運動は、当然アカデミックな世界にも生じた。大学人の社会主義運動は、エコール・ノルマルの図書館司書でフランス社会主義労働者連合、革命的社会主義労働党に加わっていたルシアン・エルの影響のもとにモース、シミアン、アルボックス、グラネ、レヴィ・ブリュール等々、後にデュルケムを中心に発行されることになる「社会学年報」の協力者(中枢メンバー)となる若い世代の研究者たちによって社会主義研究グループが結成される等活発化した。彼らは、マルクスの『資本論』を熱心に勉強し、ルシアン・エルが開設した社会主義を教え、広めるための社会主義学校等の運営に積極的に取り組んだ。(K. Thompson 1993:43, 夏刈康男 2012:85)

「定義」論文は、そうした時代の動向に目を向け「社会主義運動に深い関心を寄せ、それらが提起する問題に心を」動かされて著わされたものである。(T.パーソンズ 1982:56) 加えて、この論文には、そうした運動と

は別にもう一つ社会学方法論に関わる興味深い側面がある。それは、この論文は、デュルケムがドイツ留学によって確信を得た社会学は、社会的事実を研究対象としなければならないという観念に基づいて試みた最初期の論文ということである。ここでの社会的事実とは、もちろん社会主義である。そして彼は、この論文の首題に認められるように、社会主義を研究対象として論ずるに当って、先ず社会主義を定義することから始めた。彼は、なぜ定義することから始めたのか。それは、後に著書『社会学的方法の規準』で示されることになる「社会学者として第一に行わなければならないのは、……取り扱うべき対象に定義を与えることである。これこそがあらゆる証明と検証を行う上で第一の最も不可欠な条件である」(E. Durkheim 1981 (1895) : 34-36 = 1978 : 101-104) とする⁵⁾ 彼の基本原理に従ったからである。つまり、「定義」論文は、彼が社会主義を社会的事実として社会学の研究対象と認識したことをその研究法によって示している。

さて、彼は、社会主義を定義する意義について「定義」論文で次のように説く。社会主義を定義するためには、「全ての社会主義理論の間に共通な性格を見出すこと」が必要である。つまり、それは「もっとも温和な講壇社会主義からもっとも革命的な集産主義にいたるまでの全ての社会主義理論を比較しつつ分類し、共通に存しているものを引き出す」ことである。言うまでもなく、デュルケムがここで述べている講壇社会主義とは、彼がドイツ留学で学んだシュモラーやワグナー等の理論であるし、集産主義とは、ゲード等の社会主義理論である。デュルケムは、この「定義」論文でどの社会主義理論も排除せず、諸理論の共通性を見出すことを力説している。そこからは、彼が社会主義に関してドイツで学んだシュモラーやワグナー等のドイツ講壇社会主義についても客観化し、対象化する等、特定の学派に与しない立場によって研究しようとする姿勢が読み取れる。そうした立場に基づいて彼は、社会主義を「現にある経済的諸機能を拡散的状态から組織された状態に急激に又は漸進的に推進する一つの傾向のこと」と、社会主義への期待を込めて端的に定義し、かつ社会主義に「個人的及び利己的目的を真に社会的でしかも道德的目的に従属する」という意味での経済生活の道德化を希求する。ここで彼の説く機能の拡散的状态とは、諸機能のばらばら状態という意味での拡散であり、かつ経済的機能が中心的機関すなわち国家に規則正しく結びつけられていないという意味での拡散である。換言すれば、拡散状態とは、経済的諸機能の無組織状態あ

るいは経済的機能間の結び付きの脆弱状態を意味する。そうした状態を組織化し、個人の自由を規制して道徳的な社会状態へと変革できるのが社会主義である、と彼は説く。まさに、彼の説く社会主義とは、倫理性を有した社会に組織化し統合化し得る、現状変革の思想であると捉えられる。(E. Durkheim 1970 (1893) : 229-233 = 1988 : 179-182)

ドゥプロワージュによれば、デュルケムの自由の規制と社会の組織化の観念は、ドイツ留学中にシェフレとシュモラー等々を信奉する中から得られたものだという。(S. Deploige 1923 (1911) : 132) つまり、デュルケムが社会主義に求めた経済生活安定のための個人の自由の規制化と社会の組織化、道徳化の観念は、ドイツ留学と無縁ではないということである。

又、「定義」論文は、当時フランスにおいて対立し、後に統合することになる社会主義者ゲード派とジョレス派へのメッセージを含んだ論文としても読み取れる部分もある。そのことは、その論文の中でデュルケムが当時の社会主義運動は、分裂することによって弱体化していると危惧し、社会主義各派がわずかな違いを越えて合流し、大きく強力な潮流を作り権威を得ることになれば、社会主義運動の効果は否定できなくなると、社会主義運動の大同団結を促す主張の中に認められる。

なお、この「定義」論文には一つのエピソードがある。それは、1893年にモース等が結成し、活動していたボルドー大学の学生たちによる社会主義研究グループとフランス労働党とが共同してジョレスの講演会をボルドーで開催した。その講演の中でジョレスは、デュルケムの「定義」論文に触れ、その内容を賞讃した。そして、賞讃は、ジョレスのみならずその講演会に出席していたゲードからも与えられた。(M. Fournier 2007 : 157-158, 268-269) つまり、デュルケムは、この論文によって当時代を代表する二人の社会主義者から高く評価され、認められる存在となった。

結論にかえて

デュルケムは、社会学形成過程においてエコール・ノルマルの学生時代を除いて、シェフレ、シュモラー、ワグナー、ヴント等のドイツの社会学者から、とりわけ社会学の専門化にかかわる社会学独自の対象と方法論や新たな道徳科学について影響を受けて彼自身の社会学を形成させた。彼は、ドイツ社会学との関係について次のように回顧している。すなわち、「全てのドイツの社会科学研究は、私がフランスに知らせしめ、それ

によってフランスの社会学は、進歩することができた」(E. Durkheim 1975 (1907) : 402) と。まさにデュルケムは、ドイツ社会科学のフランス導入に貢献したことで、そのことがフランス社会学発展に寄与したことを自負している。

こうしてみると、明らかにドイツ社会科学は、デュルケムの社会学形成への影響だけでなくフランス社会学の発展にとっても特別の存在である。そうしたデュルケムに対してドゥプロワージュは、『道徳学と社会学の論争』第四章の結論部分 (S. Dploige 1923 (1911) : 137) でデュルケム社会学をわざわざ英文で *made in Germany* と強調したのである。そのようにドゥプロワージュにドイツとの結びつきを評されたデュルケムであるが、彼はドゥプロワージュがそのような指摘をするほぼ10年前に自身の社会学はコント、エスピナス、ブトルー、ルスヴィエに由来するものであり、「社会学は、19世紀にフランスで生まれた。社会学は、本質的にフランスの科学である」(E. Durkheim 1970 (1900) : 111 = 1988 : 90) と、彼の社会学は、ドイツを起源としないし、社会学はドイツではなく、フランスで生まれたことを明言している。そして、1911年に出版された『道徳学と社会学の論争』でのドゥプロワージュに対して次のように反論する。すなわち、彼のその著書は、「フランス社会学を失墜させようと意図したものであり、そもそも護教論に基づいている。」(E. Durkheim 1975 (1913) : 405) このデュルケムの反論には2つのポイントが考えられる。1つは、彼の社会学は、コントを初めとしてフランス社会学や哲学の下に形成され発展した科学であるという点である。これらのことは、コントを社会学の父と位置付、彼の実証主義を継承し、社会学を論じてきたデュルケムにとって彼とフランス社会学の存立に関わる問題である。もう1つは、デュルケムが科学としての社会学構築を目指す中で非科学的として批判する護教論排除の厳格な姿勢である。デュルケムは、1900年に著した論文「19世紀におけるフランスの社会学」(E. Durkheim 1970 (1900) = 1988) の中でル・プレーを護教論者として批判して彼をフランス社会学形成史の中に列していない。つまり、デュルケムは、ドゥプロワージュのこの著書についてル・プレーを排したと同様の理由によって基本的に認めない。このことは、デュルケムの寄って立つ社会学原理に基づくものである。

しかし、そうしたデュルケムのドゥプロワージュへの厳しい反論を認めつつもデュルケムが、社会学形成過程においてドイツの社会科学から光明

を見出し、有益な影響を受けたことは否定できない。ドゥブロワージュは、ドイツを強調しすぎた。

注

- 1) 本稿では、S. Deploige *Le conflit de la morale et de la sociologie*, Nouvelle Librairie Nationale の第三版 (1923) を用いた。
- 2) エコール・ノルマルの大学図書館図書貸出記録によると、デュルケムが初めてコントの文献（実証哲学講義）を同図書館から借り出して読んだのは、1881年9月の2年生を終える夏休み終了間際である。
- 3) この時(1885年と86年)、哲学評論誌にデュルケムが発表した書評論文のタイトルは、以下の通り。

シェフレ『社会体の構造と生活』(1885)

グンプロヴィッツ『社会学要綱』(1885)

ファイエ『社会的所有と民主主義』(1885)

H. スペンサー「教会制度」、A. ルニヤール「国家」、A. コスト・A. ビューロー・L. アレア『現代社会の諸問題』、シェフレ「社会主義の神髄」を書評して一つの書評論文にまとめた『社会科学の諸研究』(1886)

- 4) デュルケムへのルナンの影響について指摘する社会学者には、ベルナール・ラクロワ、J-C. フィューがいる。又、参考までにエコール・ノルマルの図書貸出記録を見ると、1881年5月と6月にデュルケムは、それぞれルナンの著書『キリスト教起源史』三冊と *Dialogues philosophiques* を借り出している。
- 5) 定義の必要性、重要性については『自殺論』でも次のように述べられている。「科学的研究の対象とするためには、先ず用語を定義することから始めなければならない。日常語は、常に曖昧なもので、日常語を研究する中でそのまま使用すれば、重大な混乱に陥り、科学的研究と認められない。」(E. Durkheim 1976 (1897) : 1-2 = 1995 : 17-18)

文献

- S. Deploige 1923 (1911), *Le conflit de la morale et de la sociologie*, Nouvelle Librairie Nationale.
- E. Durkheim 1970 (1893), “Sur la définition du socialism” in *La science sociale et l'action*, P.U.F. 佐々木交賢・中嶋明勲訳, 1988, 「社会主義の定義」『社会科学と行動』所収, 恒星社厚生閣.

- 1970 (1900), “La sociologie en France au XIXe siècle” in *La science sociale et l'action*, P.U.F. 佐々木交賢・中嶋明勲訳, 1988, 「19世紀におけるフランスの社会学」『社会科学と行動』所収, 恒星社厚生閣.
- 1971 (1887), “La science positive de la morale en Allemagne” *Textes*1, Minuit. 小関藤一郎, 山下雅之訳, 1993, 「ドイツにおける道徳の実証的科学」『デュルケムドイツ論集』所収, 行路社.
- 1971 (1928), “Définition du socialism” in *Le socialism*, P.U.F. 森博訳, 1977, 「社会主義の定義」『社会主義およびサンーシモン』所収, 恒星社厚生閣.
- 1975 (1902), “Note sur l’influence Allemande dans la sociologie Française” *Textes*1, Minuit.
- 1975 (1907), “Deux lettres sur l’influence Allemande dans la sociologie Française, Réponse à Simon Deploige” *Textes*1, Minuit.
- 1975 (1913), “Controverse sur l’influence Allemande et la théorie morale” *Textes*1, Minuit.
- 1976 (1897), *Le suicide*, P.U.F. 宮島喬訳, 1995, 『自殺論』中公文庫.
- 1978 (1893), *De la division du travail social*, P.U.F. 田原音和訳, 1971, 『社会分業論』青木書店.
- 1981 (1895), *Les règles de la méthode sociologique*, P.U.F. 宮島喬訳, 1978, 『社会学的方法の規準』岩波文庫.
- J-C. Filloux (1970), *La science sociale et l'action*, P.U.F. 佐々木交賢・中嶋明勲訳, 1988, 『社会科学と行動』恒星社厚生閣.
- M. Fournier (1994), *Marcel Mauss*, Fayard.
- (2007), *Emile Durkheim*, Fayard.
- M.Mauss 1971 (1928), “Introduction” in *Le socialism*, P.U.F. 森博訳, 1977, 『社会主義およびサンーシモン』恒星社厚生閣.
- 中島道男 1997, 『デュルケムの<制度>理論』恒星社厚生閣.
- 中 久郎 1979, 『デュルケムの社会学理論』創文社.
- 夏刈康男 1996, 『社会学者の誕生』恒星社厚生閣.
- 2012, 「ジョレスとデュルケム, モースの結び付き」『日仏社会学年報』第21号.
- 2016, 『デュルケムの社会学』いなほ書房.
- T. パーソンズ著 稲上毅, 厚東洋輔訳, 1982, 『社会的行為の構造』3, 木鐸社.

P. Steiner (1994), *La sociologie de Durkheim*, La Decouverte.

K. Thompson (1993), *Emile Durkheim*, Routledge.

P-P. Zilio (2001), *Durkheim*, Hachette.